

会 議 録

会議の名称		令和元年度第2回守谷市協働のまちづくり推進委員会		
開催日時		令和元年11月18日（月） 開会：午前10時　閉会：午後0時00分		
開催場所		守谷市役所3階庁議室		
事務局（担当課）		生活経済部　市民協働推進課		
出席者	委　員	石井会長，徳田副会長，佐藤委員，小澤委員，荒川委員， 高木委員，正木委員（10名中7名出席）		
	事務局	松丸市長，岩田生活経済部長，鈴木市民協働推進課長，会見補佐， 高橋主査，柳葉係長，豊谷主任		
公開・非公開 の状況		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数	1人
公開不可の場合 はその理由				
会 議 次 第		1　開　会 2　会長あいさつ 3　市長あいさつ 4　報告事項 ・協働のまちづくり事業見直しに係る実施状況 5　答　申 ・守谷市協働のまちづくり推進指針[改訂版] 6　閉　会		

確　定　年　月　日	会　議　録　署　名
令和元年12月23日	石井　大一朗

審 議 経 過

1 開会

事務局（鈴木）： 開会に先立ちまして、委員の皆様には「会議録における発言者氏名記載の是非」について御協議いただきたいと思います。

本日の「守谷市協働のまちづくり推進委員会」は、会議録を公表することとなっていますが、発言者の氏名は原則非公表、「ただし、発表者の氏名を公にしても率直な意見の交換及び意思決定の中立性が不当に損なわれる恐れがないと認める場合であって、かつ、会議において承認を受けた時は、この限りでない」と規定されています。

本年の7月に開催しました本委員会においては、氏名は記載しても良いとの御判断を得ておりますが、この方針を継続し、氏名は記載することによろしいでしょうか。

【全会一致で各委員の氏名記載を了承】

2 会長あいさつ

【会長あいさつ】

3 市長あいさつ

【市長あいさつ】

事務局（鈴木）： それでは、「守谷市協働のまちづくり推進条例施行規則」第9条第1項の規定に基づき、今後の議事進行を石井会長にお願いします。なお、委員総数10名のうち7名が出席ですので、「守谷市協働のまちづくり推進条例施行規則」第9条第3項の規定により、本日の委員会は成立いたします。それでは、会長よろしくお願いします。

4 報告事項

・協働のまちづくり事業見直しに係る実施状況

石井会長： それでは報告事項「協働のまちづくり事業見直しに係る実施状況」について、事務局から説明願います。

事務局（柳葉）： 【資料に基づき説明】

石井会長： ありがとうございました。ワーキングチーム座長の徳田副会長から何かありますか。

徳田副会長： これを取りまとめたときは「キャッチフレーズ」をつけましょう、チラシの手直しや応募様式を改正しましょう、ということをワーキングで検討しました。しかし、その後の進め方を共有できていませんでした。実際に手直しする時にもう一度、ワーキングで揉むという作業も必要だと思います。このままだと改正したものを、翌年見るという事になりますので、改正する方向性を検討する機会があった方が良かったという反

省があります。今日、追加の資料がありますが、例えば応募様式の改正はこんな感じで、チラシはこういうのでやりますなど、委員会で検討する機会があつてしかるべきだと感じました。その辺がきちんと打ち合わせできていませんでした。

石井会長： ワーキングでいろいろな意見が出て、それに基づいて改正していますが、最終改正する前に検討が必要だという事ですね。細かいスケジュールが分かりませんが、今年度は時間的に難しいですか。

事務局（柳葉）： チラシは12月10日から配布しますので、今日、御意見をお伺いしたいです。また、メール等で御意見をいただければ修正します。

徳田副会長： 協働事業のチラシはどうなっていますか。

高木委員： 協働事業のチラシは、NPO協働もりやで検討しています。大人向けと子供向けの2種類を考えています。子供向けのチラシは5、6年生を対象に冬休み前に各学校を通じ、生徒へ配布する予定です。市民活動支援センターでは毎年、「子供新聞」を募集していますが、例年200点くらいの応募があります。今回はハードルが高いので、それほど応募はないと思いますが、何枚かアイディアを持ってきましたので、今日御意見をいただきたいです。

石井会長： 今のチラシの話でもいいですが、今後、より良くしていくためのロードマップというか、どうしていこうかというところが議論できていなかったのので、本当は議論した方がいいよね、というのが徳田副会長の提案ですね。

徳田副会長： 今、実際の作業の部分が進んでいますが、このままだとこれが自動的にリリースされます。今こういう方向で検討していますというのをワーキングに見せていただき、キャッチボールができればいいです。このままスタートすると、来年のワーキングで、去年こうでしたと1年ごとの確認になります。それをやる前にもう一度検討していれば、半年ごとのサイクルで見直しができます。そんなイメージです。

石井会長： ワーキングをやる時間的余裕はないですよ。

徳田副会長： チラシはそうでしょうが、助成金の様式の改正は出来そうですね。

事務局（高橋）： 要綱改正は来年度からのスタートですので、まだ時間があります。メール等でのやり取りで御意見を取り入れ、改正に踏み込むことは可能です。皆さんに御協力をいただければ、より良いものが出来ると思います。

事務局（柳葉）： 今後、現行の様式と改正案を比較できるものを作成し、メールでお送りしますので、御意見をいただきたいと思います。

石井会長： 年度内に出来ることはやっただき、助成金のチラシやそれ以外も含め、皆さんから御意見、御質問をお願いします。

小澤委員： 提案事業募集の子供向けのチラシは、配られて終わってしまうと思うので、学校に趣旨を伝えた方が良いでしょう。子供新聞は定着しており、やらなければならないものの中に組み込まれているので、ある程度の応

- 募があるでしょうが、このチラシだけだとなかなか難しいと思います。
- 石井会長： チラシの良し悪しだけでなく、学校への説明や学内での位置づけをもう少し示す必要がありますね。他に御意見はありますか。
- 松丸市長： 小学生だけではなくて、中学生からの提案事業募集というのはどうなのですか。
- 高木委員： それも考えましたが、小学生と中学生へのチラシは違うと思います。あまり多くはやれないので、とりあえず今回は小学生にしました。こども新聞も、7月の校長会で説明し、やる手順は踏んでいます。提案事業募集は初めてなので、校長会で説明させてもらえればいいと思います。グループや保護者と一緒に考えてもらえれば、いろいろな提案が出るかもしれません。
- 荒川委員： 少し外れますが、小学生からの提案にもある子供ヘルパーですが、高野小学校と松ヶ丘小学校にしかありません。良い取り組みなので、全小学校に広げればいいと思います。
- 高木委員： そういう提案をしてもらえればいいですね。学校で、バックアップしてくれるボランティアの皆さんが、学校と連携できるかだと思います。忙しい学校にお任せはできませんので、なかなか難しいと思います。
- 正木委員： 子供ヘルパーですが、高野まちづくり協議会では、絆部会が担当し、実施しています。多い時は2,30名のヘルパーがいましたが、今は7,8人です。2つの小学校でしか取り組んでいけませんので、全小学校に広げればいいと思います。今の小学生は、塾などで忙しいため負担になっているようです。茨城県内でも唯一、守谷市で子供ヘルパーが存続しているという事なので、ぜひ継続させたいです。敬老会等で高齢の方とも触れ合っています。今後の活動を活発化させたいと思います。
- 石井会長： 子供ヘルパーの件は重要なことですので、後で深めていただきたいと思います。協働事業全体に対して、もう少し意見を伺いたいと思います。
- 事務局（高橋）： 「パラスポーツ体験会の実施」を事業提案したのも、子供ヘルパーで活動していた方ですので、そういうところに募集のチラシを直接持っていき、呼びかけるのも一つの方法だと思います。
- 石井会長： 呼びかけは伝わりやすい方にすることが大切ですね。
- 小澤委員： このチラシの他にガイドブックがありましたが、その中には具体的な申請事例は掲載していますか。
- 事務局（柳葉）： 今までの申請事例は掲載していません。
- 小澤委員： 私の団体が県の助成金を2回いただいています。この助成金にはまだ応募していません。どういう事業が採択されるかがよく分からないからです。県の助成金は、ホームページに採択された事業や、活動の様子が載っているので、自分の活動が該当するか分かりやすいです。ガイドブックにも申請事例等を掲載すれば、応募がしやすくなると思います。
- 事務局（柳葉）： ホームページには申請された事業を掲載していますが、今後、ガイド

ブックにも掲載し、改善していきます。

石井会長： チラシの件や幅広く公募する方法、伝わりやすい方への募集呼びかけなどの意見が出ました。徳田副会長からも意見を言っておしまいではなくて、もう一度しっかり検討する時間を作るべきだという意見がありました。要綱の改正はまだ時間があるので、そこはやっていきましょう。助成金のチラシは時間がないので、他の自治体のチラシ等を参考にして改善したらいいと思います。

徳田副会長： この場で細かいところまでやるかは別にしても、助成金を受ける側からすると一番気になるのは金額です。金額によって事業の規模感も見えてきますし、裏面ももう少し整理すると分かりやすくなると思います。

5 答 申

・守谷市協働のまちづくり推進指針〔改訂版〕

石井会長： 次は、「守谷市協働のまちづくり推進指針」〔改訂版〕に対する答申です。前回の協議での修正内容とこれまで委員の皆さんからいただいた御意見などについて、事務局から説明をお願いします。

事務局（高橋）： 【資料に基づき説明】

石井会長： まずはこの指針の案を確定させ、答申します。皆さんから御意見をいただいた完成版でいいかという事で、大きな変更やその他については、全体を見直すときにやっていきます。この答申後に、今後、これを具体的に進めていく際に、守谷市としてどんな点を議論していくべきか、という時間は後でとるという事ですね。では、皆さまから御意見があればお願いします。次の見直しや改訂はいつになりますか。

事務局（高橋）： 条例上は3年となっていますので、再来年です。また、必要に応じてとなっていますので、至急見直す必要があれば条例の改正はあり得ると思います。

石井会長： 改訂の流れが書いてあるといいですね。これができてから何年たって、誰がどういう場を踏んで改訂したのかというのが分かればいいですね。

事務局（高橋）： 27ページに付属資料がありますので、そこにこういうメンバーでこういう流れで改訂しました、というのを追加したいと思います。

石井会長： 皆さんよろしいですか。それでは再度お諮りします。令和元年7月26日付で市から諮問を受けた「守谷市協働のまちづくり推進指針」〔改訂版〕については、これまでの意見等を反映させた内容で答申という事によろしいでしょうか。

【一同異議なし】

ありがとうございます。それでは答申に移りたいと思います。

事務局（鈴木）： 石井会長ありがとうございます。令和元年7月26日付で諮問させていただきました「守谷市協働のまちづくり推進指針」〔改訂版〕の策定に対する答申を石井会長から市長にお願いします。

【会長が答申書を読み上げ、市長に手渡す】

ありがとうございました。守谷市協働のまちづくり推進指針の改訂について、会長から総括をお願いします。

石井会長： 皆様からいただいた意見一つ一つが重要なもので、総括の一つのコメントになるだろうと思っています。大きなビジョンや方向性はここに示されました。ただ、これを実際にどういう風に進めていくのか。前回の会議の中で佐藤委員がおっしゃった、そこに自分がいないように読める、というのは重要なことだと思います。仕組みが変わっていく中で、新しい方達が一人でも多くまちづくり協議会に参加したり、助成金を活用するようになってほしいと思います。そういう点では、これがようやくスタートだと思っています。仕組みができて関係ないという人が多いままでは、まちは変わっていきません。これから協働事業の見直しを検討するという意見も出ましたので、それを踏まえ、皆様から御意見をいただき、実体化していくというところに力を注いでいきたいと改めて思いました。指針の内容に関するものではありませんが、そんなことを思いました。

事務局（鈴木）： ありがとうございました。市長からもコメントをお願いします。

松丸市長： 石井会長がおっしゃったとおりだと思います。出来ればこういう指針も皆さんに案文を作っていただき、いいとこどりをするくらいのレベルになればいいと思っています。昨日、一昨日と松並青葉東地区、西地区、ひがし野地区と比較的新しく守谷に越してきた方々と、タウンミーティングを行いました。皆さんすごく冷めている印象を受けました。まちづくり協議会の件に関しても、納得できないと皆さんに説明できない、納得するだけのものが揃ってないという事でした。私は地域主導とか市民主導というところで、どちらかというと行政の提供型ではなくて、パートナーシップの中でまちづくりをしていこうと思っていますが、概念的に違いを感じました。佐藤さんの話でもありましたが自分事には思えないという、何かボタンのかけ違いがあるのかなと思いました。その辺の感覚の違いをどうしたら埋められるのか、もっと市民と近いところでやっていくことができれば、行政の効率化にもつながるし、市民の満足度も高まります。その距離感の詰め方をどうしたらよいかと思っています。

石井会長： これからの時間は、全員の方に発言していただきます。今の市長からのコメントについても、こんな考え方があるのでは、という意見や、これからの指針、協働を進めていくうえの議題とか、こういうテーマがあるのではという、ざっくりばらんな場として残りの時間を使えばと思います。

正木委員： 私は高野まちづくり協議会の副会長をやっています。市長からあった市民との一体感がないということですが、協議会は出来てからまだ1年

足らずですので、いかにして住民との一体感をもたらしていくかは、一つの課題です。その根底に置かなくてはいけないことは、活動はあくまでボランティアではありますが、行政の一端を担っているという使命感です。なので、各自治会との連絡を密にしていけることが大切だと思います。高野地区は、協議会と28の自治会がありますが、それがばらばらだと思います。本当は、それらをまとめて協議会があるべきだと思いますが、まだそこまで行っていません。そういう組織を早く作っていきたいです。各自治会が抱えている課題や問題点、住民の生の声を早く吸い上げ、協議会で話し合い、それを住民に還元していくといった事が出来れば理想的だと考えています。まだまだできたばかりですが、市長が考えているような線で進めていきたいと思っています。

石井会長： 今の話で一体感が難しいという事ですが、どのようにすればそれが改善されていくと考えていますか。

正木委員： まちづくり協議会の母体は地域福祉活動計画実行委員会ですが、それが地域と密着していませんでした。どちらかというと民生委員が中心に活動しており、住民を巻き込んだ活動になっていなかったと思います。この母体に区長や各団体の役員を巻き込んで、ようやく地域住民の声を吸い上げる組織になりました。その辺から一体感が生まれてくればいいなと思っています。

石井会長： 現状の難しさも含めて御紹介していただきました。他の委員さんはいかがですか。

荒川委員： 民生委員が中心だという事ですが、高野地区はそういう状態だったのですね。

正木委員： 私が入った時は、区長出身は私が最初でした。協議会に助成金の申請をしましたが、なぜ区に助成金を支出しなければならないのだと皆さんに反対されました。私が説得して5万円の助成金をいただき、防災用のリヤカーや防犯パトロールのベストを買い、大変役に立ちました。結局、福祉にしか関心がなくて町内会の活動には目がいかなかったのです。今は改善して区長とも連携しています。

松丸市長： 職員がそれぞれの地域の皆さんの声を聴きながら、一生懸命やっていますが、行政がサービスを提供するというだけでは、これからはやっていけません。行政と市民がパートナーシップを持ち、それぞれが役割分担し、行政の苦手な部分は市民の皆さんにお願いできればいいと思っていますが、その辺はいかがでしょうか。

小澤委員： 私は逆に今の若い方は受けになっていて、昔に戻るのではないかと思います。私の夫が今年、町内会の会長になりましたが、単身赴任と重なってしまい、私が会長の仕事をしています。私の町内会は若い人が多く、10人の役員の内40代と30代が半々です。40代の役員はなるべく自分たちでやろうという考えですが、30代の役員は会社でも忙しく、

子どもも小さいので、土日に町内会の仕事をやるということは大変です。町内会のイベントなどもアウトソーシング出来るならその方が良いという方が多いです。協働で、協働でと言いますが、協働でやりたいとは思っていないようです。

石井会長： 協働、協働といっても若い世代の方は、なかなかそういう状況にないという事がありますよね。他にどうですか。

佐藤委員： 私も子育て目線で言いますと、子育て世代は目の前の子育てと仕事と家事で精一杯です。市全体のことを考えて皆で動こうねと言われても、余力がないのが正直なところですよ。しかし、これからのまちづくり、地域づくりのためには、若い世代も入らないと成り立ちません。ちょっとしたところでいいので、気軽に集まれる場がもう少しあればいいなと、感じています。自治会、町内会、子ども会の集まりに関しても、基本的に子どもを預けて大人だけで粛々で行う場、というイメージがあります。総会でも報告を聞き、子どもを騒がしてはいけないとなると、子どもを預ける場がないのでどうしても敬遠してしまいます。子どもが気軽に遊びに来られるような、もう少しオープンな場を作ることが必要だと思います。そこから自然と会話が生まれて、実はこういうことで困っているという話になれば、もう少し繋がりができると思います。

石井会長： 参加していく際に、環境面の改善が必要だという事ですね。

佐藤委員： 私は環境美化や神社のお祭りの準備に、家族連れでいきましたが子どもは一切参加していませんでした。

荒川委員： 私の地区では、地域のイベントの案内を、子どもからお年寄りに発信していますが、敬老会でも、家族でいらしてくださいと回覧しても家族での参加者はいません。

石井会長： 発信だけで言えばさっきのチラシもそうですが、発信しているチラシの内容は誰が考えて、誰が発信しているかを考えれば、伝わらないのは皆さん分かると思います。若い人に伝えたいければ、若い人が主となって発信しないと伝わらない。お金を使って良いイベントをしても、若い参加者が来ないということが繰り返されます。その最初の部分は骨を折るしかないと思います。

高木委員： 私も地域のまちづくり協議会で活動しています。私の地域は、正木委員の地域のように民生委員が中心ではなく、色々な方が入って活動していますが、それぞれの地域で特徴があっていると思います。大野地区の活動はうまくいっています。私の町内は駅まで15分くらいのところで、若い人が入ってくると、よく来たね、ということで町内こぞって歓迎します。また、町内会で子どもが対象の催しを月に1回くらい実施します。普段から参加しやすい環境を作っていくことが重要です。高齢者はそういうことをバックアップするスタンスで、いつも参加しています。来週もクリスマスの準備を子どもと一緒にやります。先程、小澤さんが言っ

たように、若い世代しかいないと大変かも知れませんね。

小澤委員： この前、高木委員の地域のイベントを見せていただき、私の町内会でも流しそうめんを実施しましたが、200人も集まってしまいました。参加者は多いのですが、ボランティアスタッフは少なく、役員は家族を動員して対応しました。今年の役員は大変だったので、来年はやれないということになり、繋がっていきません。実施することは良いのですが、スタッフが少なく疲弊してしまい、アウトソーシングしたくなってしまうのです。

高木委員： アウトソーシングを受けてくれる高齢者のチームと、協働でやればいいですね。例えば町内で流しそうめんが得意な高齢者を10人くらい集めることができれば実施できます。その地区だけで探すのが難しければ、高齢者が多い地区に協力をお願いするのもいいかもしれません。

石井会長： 支援センターに間に入ってもらって進めるといいかもしれません。協議会を作ると難しくなるのは、協議会を超えたところと連携しにくくなるという事がありますので、センターをかますことで連携しやすくなると思います。今それぞれで活動されて感じていることや悩み、施策とか政策、あるいは新しい事業としてこういった論点やテーマがあるのではないかと、これを議論し、こういう仕組みに変えていった方がいいのではないかと、という点を出してほしいと思います。

小澤委員： 協議会同士の繋がる場所や他の協議会の活動が気さくに聞ける場があればいいと思います。

事務局（高橋）： 実は私もそう思っています。現在、5地区で協議会ができ、来月守谷Bブロックでも協議会が設立されます。守谷地区の他の3地区でも準備会ができていますので、年度内に合計9地区で協議会が設立される予定です。そこで「地域の理想実現ミーティング」という事で、情報交換会を開催します。そこでは各地区の紹介とテーマを決めて議論していただく予定です。それぞれの地区の課題を共有したり、先程、高木委員からあった、協働の取組みができる可能性があります。毎回テーマを決め、地域の理想の実現を目指して、12月17日に開催する予定です。

石井会長： その会議にはファシリテーションが大切だと思います。ただ事例の紹介があってもそれだけで終わってしまいます。

事務局（高橋）： そうですね。推進指針にもあったように推進組織や支援組織の確立とコーディネート機能が重要になってくると思います。今は、私や職員が各まちづくり協議会でコーディネートをしていますが、今後は、職員や専門家のお力を借りて、コーディネートしていくことで、よりうまくいくと思います。もし来月の会議にお願いできればファシリテーションを依頼したいと思います。

石井会長： いいアイディアを出すとか、課題解決の方向性が見えることなどは大切ではなくて、そこに今までいなかった人が言葉を発するとか、次の会

議に来てくれるとか、そういう場づくりは、なかなかそれを専門にやれる人でないと出来ないと思います。守谷市で言えば、まちづくり協議会の事務局がどう変化していくのか、というところが最大のテーマだと思います。本当は出来上がるまでのプロセスの中で、新しい方に参加してもらって、今までの方に、半歩下がってもらうことが重要だと思っています。新しい事業を作り出すときに、こういう事業が必要だよと議論する場が大切で、そこに当事者の方がどう入ってくるかだと思います。そこの最初は、お金を少しかけてでも、結果的に参加者が少なくても、そこに今までいなかった人が一人二人議論に加わっていることが成果になってくると思います。そういう事を意識してやれば良いと思います。

松丸市長： 会長が言ったとおりだと思います。協議会ができて、いつまでも行政がやっていると行政主導になってしまいます。行政は立ち上げまで一生懸命やって、後は自立性、自尊性を高めていってもらって、役回りを変えていかないといけないと思います。行政はどうしても硬いので、それはダメだと言わなくてはいけない時があり、それじゃあ行政がやればという事で戻ってきてしまいます。そこの揺り戻しが怖いので、手離れをしていくタイミングがすごく難しいと思っています。

石井会長： 小澤委員が言われたように多くの若い方は、なんでそれをやらなければいけないのかとか、そこに行けば何か景品がもらえるのかなど、メリットを意識してしまうという人が多くなっているという印象です。ただ一方で社会生活基本調査などでは、日本人全体、また若い世代の自由時間も増えています。増えた自由時間をどこに使うかという問題なのですね。もう一つのアンケートの中で、ボランティアやまちづくりに貢献したいか、いずれはしたいという方が結構多いのです。今はしてないけど。ということは、全く関心層が減ってきているという事ではないのですね。自分がやりたいことをやれるかとか、そこに参加すれば成長できるか、といういくつかの要素があると思います。

徳田副会長： 行政と市民のパートナーシップが出発点だと思いますが、難しいなと思うのはお互いの不信感というものがあるからだと感じています。協働を進めましょうというのは市民の側からすると、全部やらされていると感じると思います。行政の側からすると、例えば窓口だと、基本的に市民は文句を言ってくる人間だということでお互いに不信感がある。こういう中ではパートナーシップはできないと思います。結局、公益というのを誰が担うのかということになってくると、国レベルでも方針で言えば新自由主義的に行くのか、社会民主主義的に行くのかという大きな話の中でぶつかり合うものなので、どうしても不信感というものが拭えないと思います。その中で、いかに信頼関係を作っていくかということがまず一つあります。イベントをやると多くの人が集まってしまい、アウトソーシング出来ればなというところがあれば、そういうことは得意

だという人たちをいかに繋ぐかという話になってきます。ソーシャルキャピタルみたいな議論の中で、二つの機能があり、一つ一つの団体をいかに仲良く繋ぎ、ボンディング・接着剤みたいに固めることと、ブリッジング・いかに橋渡しをするかという両方の機能が必要だと思います。そういう観点からすると、どこか一か所が頑張っているのは不幸だと思います。子育てのサークルはそこだけで集まっている、それが自治会に入る必要はなくて、自治会と頑張っているサークルが繋がればいい話だと思います。それを有機的に繋いでいくという点では、コーディネーターという話になってきます。それを市民活動支援センターが全部やるというのは大変なので、小さいコーディネーション機能を担う人たちがあちこちにいて、そのコーディネーター同士が繋がるというように広がっていけばいいと思います。イベントのやり方等を工夫していくと、不信感も少しずつ和らいでくるのかなと思いました。

石井会長： 行政と市民の信頼関係を作る、というところがポイントですね。具体的なアイデアで、清里でやっている「繋ぐ人フォーラム」を協議会ごとにやってもいいし、集まって全体でやってもいいということです。

ここ3年5年で新しい仕組みが出来てきた時に、これまで繋がっていなかった人同士が繋がったり、新しい人が参加して声を出せたとか、そういうところに時間とお金を使うことはありかなと思います。その一つが「繋ぐ人フォーラム」とか事例紹介等の場づくりだと思います。

また、まちづくり協議会を進めていく際の、人材育成はどのように進めようと考えていますか。庁内でこういった仕組みになっているよ、と共有する研修は私も参加しましたが、地域の方達や中間支援センター対象のものは何か考えていますか。

正木委員： そこが問題だと思います。現在の協議会のメンバーを見ると高齢者が多いです。若い人にどうやってバトンタッチしていくかが課題です。市民と協議会、行政と協議会の一体感については、今のところスムーズにっています。高野まちづくり協議会には高橋主査を始め、市の担当職員がいつも3、4人出席してくれて、いろいろなアドバイスをいただきうまくいっていると思います。確かにこれからの課題は人づくり、後継者をいかに育てるかだと思っています。

高木委員： 人材育成は、市民大学がテーマとしています。徳田副会長にもお世話になり、ファシリテーターやコーディネーター育成講座を実施しています。来年からは駅の近くで夜7時からの講座を計画しています。あまり若い人は参加が難しいと思いますが、もうすぐ定年を迎える人を受講生の対象にします。

石井会長： 他の自治体でも市民大学というのはたくさんありますが、同じ受講者が多いという悩みがあるようです。一方で、新しいまちづくりを見ますと、華やかなものが出来上がったり、朝活をやっています。どうい

う企画がいいのかは、抜本的なところから見直す必要があると思いました。意外と世代を区切るのもポイントだと思っていて、40歳以下とか、概ね30歳代とかの若者たちは繋がりたいと思っている人がいます。私が日光で40歳までを対象に、1年間毎月1回、まちづくり塾をやった時に、日光を愛していて悶々としている人が集まってきて、自分たちで好きなプロジェクトを出し合って3つ実現しようという事でやりました。そこで繋がると彼らが地元のことに関心を持ち始めて、地元で何かやっていこうとなります。この方法は人材育成を進める一つのやり方だと思います。

たくさんの意見が出て簡単な解決策はありませんが、出た話で特徴的なのはこれが課題なんですよ、という社会問題についてのものはなかったということです。つまりそれがポイントで、人が繋がるとか、人材育成どうするかとか、働き方が違う人たちにどうアプローチするかとか、そういうところを守谷市ならではの分析をした上で考えて、人材育成のプログラムを考えてみるというふうにやっていかないと、ちょっとしたマイナーチェンジでは変わっていかない気がします。人づくりというのは今やっている人がスキルを持つのと、関わっていなかった人が関わるというのがあると思いますが、今後議論する機会があれば、守谷市の人づくりを作り直していく必要があると思いました。

繰り返しになりますが12月17日にあるような事例発表会などの場を作る時に、ファシリテーションを重視して進めたらいいのかなと思いました。ご意見をたくさんいただきました。これで終了します。

6 閉 会